

国境の考古学

古典期アッティカの辺境をめぐる

周藤 芳幸

I. はじめに

「ポリスとは何か」という問題は、古代ギリシアに関心を寄せるものにとっては避けて通ることのできない、そしてそこに継起した歴史の現代への意義を追求する営みの中で常に念頭におかなくてはならない基本的な問いかけのひとつであろう。古代ギリシア人がポリスと呼んでいたものを、現代の我々は都市、都市国家、共同体国家、市民共同体などの様々な語に翻訳して理解しようとしているが、そのような試みは、いずれも「ポリスとは何か」という無言の問いかけに対する研究者の側からの主体的な応答の現れに他ならない。即ち、社会生活の中心として人々の群れ集うアゴラを核とするポリスの都市的景観を重視するものにとっては、ポリスを都市と訳すことが相応しいであろうし、ポリス内部における政争やポリス相互の複雑な外交関係に現代の国際情勢を二重写しに見るものは、それを都市国家と呼ぶことに魅力を感じるであろう。一方、ポリスの本質を原則として土地所有に立脚する排他的な市民権によって結ばれた市民団の存在にみる立場からは、ポリスを何よりもまず市民共同体として把握する視点が強調されよう。

いずれにせよ、微に入り細をうがう膨大なギリシア史研究の積み上げを通して、ポリス及びポリス社会の理念について既に多くが語られてきている。しかし、その理念ではなく現実についてはどうであろうか。研究対象を研究者自身が観察することのできる文化人類学のフィールドワークの場合とは異なり、古代史研究に際しては、当然のことながらインフォーマントの残した情報（碑文や古典史料など）がその主な研究手段であり、インフォーマントにとって何らかの意味で重要であった理念については史料に豊富な言及があるために研究が進んでいるが、インフォーマントが語らない現実については説明が遅れがちであるという状況が生じる。ポリスが都市部とその周囲に広がる田園部からなっていることは周知の事実であるが、ごく最近まで田園部の様相に目が向けられることが稀であった状況は、その傾向を如実に示していよう⁽¹⁾。

本稿では、そのような状況を踏まえながら、ポリスの理念よりはむしろ現実にアプローチする試みの一端として、古典期アテネの国境の問題を考えていくことにしたい。ここで国境の問題をとりあげるのは、主として次の三つの事情による。

まず第1に、ポリスの様々な特性のひとつとして、その非領域性がしばしば指摘されてきている。よく知られているように、アテネ、テーベといった国名は現代の我々が用いる便宜的なものであり、当時の人々は自らの国家をアテーナイオイ（アテネ市民達）、テー

パイオイ（テーベ市民達）というように、市民の総称名によって呼び慣わしていた。そして、これはとりもなおさず「ポリスは構成員たる市民の人的結合であって、領域は第二義的な意味しかもたなかった」ことの象徴と考えられている⁽²⁾。理念としては、まさにその通りであったろう。しかし、その市民としての権利が不動産所有と密接な関係にあったことは、市民団とポリスの領域との間にも同様に密接な関係があったことを示唆しているのではないだろうか⁽³⁾。しかも、ポリスは理想国家のように単独で存在していたのではなく、一般に他のポリスと境を接して存在していた⁽⁴⁾。そうであれば、制度的に相容れない、時には敵対的な関係に立つ二つのポリスの領域が接する際に、そこにどのような状況が創出されたのかという問題は、ポリスの現実を考える上で看過することができない⁽⁵⁾。

第2に、次節で紹介するように、近年特にアテネの国境地帯においてフィールド踏査が活発に行われつつあるが、それらの成果は筆者自身によるそれも含めてしばしば考古学的証拠の紹介に重点がおかれ、その社会経済的な性格に対する解釈は後手にまわっている観が否めない。またそれらが歴史的な位置づけを伴って論じられる場合にも、従来の研究動向の弊を被ってか、国境地帯は複数の対等なポリスの境界地域としてよりは、むしろ特定のポリス（アテネなど）の中心市に対する辺境という観点から考察されることが多い⁽⁶⁾。国境地帯に独立した積極的な意義を認め、フィールド踏査の成果を十全に活用することによって国境の様態を明らかにしようとする研究は、なお乏しいのが現状である。

第3の事情は、いささか個人的なものである。筆者は既に古典期アッティカの辺境で広範に観察される塔を伴う孤立農場の意義について、何回か口頭発表の形で私見を問う機会を得たが⁽⁷⁾、その際、とりわけアテネとメガラとの国境地帯に分布する例に関して、制度的にどこまでがアテネに属するものであり、どこまでがメガラに属するものであるのか、という質問を受け、返答に窮したことがあった。むしろ筆者の主張の眼目は、そのように中心市で定められた厳格な制度が及びきらないような辺境にこそ孤立農場は成立したのではないか、という点にあった訳であるが、その時点においてそれはあくまで筆者の推測に過ぎず、両ポリスの国境に関して、さらには一般にポリスとポリスとの境界地域に関して、改めてその実態を究明する必要性を痛感させられた。そこで、とりあえずアテネの国境地帯についてだけでも、最新の知見に拠りつつある程度の見通しを得ようというのが、本稿の根底にある目論見に他ならない。

さて、既に述べたように、国境紛争に関する僅かな言及を除き、文献史料には国境の現実に関して多くの情報を期待することはできない。そこで、ここでは考古学の成果に加えて、民族誌（ethnography）の成果をも参考にしながら、国境地帯の実態に迫ることとする。

II. フィールド踏査の方法論

今日では、ポリスの諸相を論じるにあたって歴史研究者が考古学の成果を繰り返し参照

することは、もはや稀なことではない。しかし、ここではまず近年急速にその重要性が認識されつつある考古学的調査の方法について、簡単に言及しておく必要がある。

考古学的調査は、大きく発掘 (excavation) とフィールド踏査 (field survey) とに分けることができる。フィールド踏査は、野外考古学 (field archaeology) と表現されることもあるが、この語は室内における遺物の実測や分析に対する野外での調査、即ち発掘を意味する方がより一般的であり、誤解を招くおそれがあるので避けるべきであろう。この二つの方法の相違は、発掘が主として特定の点における時間軸に沿った縦のシーケンスを問題とするのに対して、フィールド踏査が特定の時期における遺跡・遺構の空間的な横の配置を重視することにある⁽⁸⁾。そしてポリスの都市部の農業基盤たる田園部を探求する過程で注目されてきた考古学的調査の方法こそ、後者のフィールド踏査に他ならない⁽⁹⁾。

フィールド踏査は、発掘を伴わない野外での調査の総称であり、そのメリットは何よりも発掘という美名のもとに遺跡を破壊することが避けられる点にある。これはさらに、その精度に従って粗放的 (extensive) な踏査と集約的 (intensive) な踏査とに区別される。集約的な踏査とは、対象となる地域にあらかじめ設定された区画に従って、一般に数人から十数人の調査者からなるグループが、相互に10mから20mの間隔で横一列になり並行して表採を進めていく作業をさす。踏査の範囲は、サザンプトン大学が中心となって行ったミロス島のサーヴェイのように、対象地域からいくつかの区画をサンプルとして選ぶことによって全体を代表させる場合と、南ヴォイオティアにおいてケンブリッジ大学とブラッドフォード大学とが合同で行っているように、全地域をこの方法でカバーすることを意図する場合とがある⁽¹⁰⁾。但し、集約的な踏査の場合でも、実際には障害物 (現代の建築物、軍事基地など立ち入りの許されない区域など) が存在するために、上述の方法を徹底させることは不可能であり、実際面では粗放的な踏査と比較して格段に優れているとは言いがたいことが指摘されている⁽¹¹⁾。人海戦術を特徴とする集約的な踏査とは対照的に、粗放的な踏査の場合には一人でも実行が可能であり、表採を現地での観察で代替すれば面倒な調査の手続きも不用となる利点がある。

アッティカの辺境でこれまで集約的な踏査が行われているのは、ヴォイオティアと境を接するパナクトン周辺のスクールタ平野に限られており、その成果も概要しか報告されていない。従って、ここでフィールド踏査として言及するのは、主に粗放的な種類のものである。

なお、フィールド踏査の成果を歴史研究に援用するにあたっては、問題となる時期の自然環境に関する理解が不可欠となるが、この点においてアッティカを含む南部ギリシア本土の乾燥地帯 (これは、古代の重要なポリスが集中する地域に相当する) においては、古典期までに現在とほぼ変わらない気候に落ち着いたことが立証されている⁽¹²⁾。逆に、そのような認識こそが、1970年代以降フィールド踏査の意義が急速に評価されるようになり、大規模なプロジェクトが次々と実行に移されるようになるインセンティブを与えたともい

えよう。古代ギリシアの自然環境とそこにおける人間の適応活動を語るためには、現代のギリシアのそれに対する研究から始めなくてはならない。この点において多くの貴重な示唆を与えるのが、次に述べる民族学的調査からの知見である。

III. 辺境の生態学

ボリスの辺境を含む田園部における土地利用形態に関しては、周知のように土地の賃貸に関する碑文やヘカトステー碑文を手掛かりとして既に多くの重要な論考が得られている。しかし、それらの研究を読むと、古代ギリシアの自然環境と土地利用の現実について、精緻な史料分析とは裏腹に不十分な生態学的理解が議論の中に紛れ込んでいる状況を目にすることがままある⁽¹³⁾。丘陵地や山間の僻地がひとしなみに穀物や果樹の耕作には適さず放牧や養蜂にのみ利用されたと仮定されるケースなどは、その好例といえよう。経済的に最も重要な果樹のひとつである栽培種のオリーブの植樹育成方法についても、その特殊性が十分に考慮されていない場合がしばしばである。また、森林、耕作地、放牧地、荒蕪地などは、それぞれが独立した現象ではなく連続した生態系の鎖を構成しているが、このような生態系の在り方の現実に注意が払われることも少ないようである。

このような点に関して示唆に富む知見を提供するのが現代のギリシアの農村部で行われている民族学的調査であり、とりわけ南アルゴリス半島部（図1）では、この地が前近代の経済システムを色濃くとどめているのと、フランクティ洞窟という先史時代の重要な遺跡を擁しているために、そのような調査が活発に行われてきている⁽¹⁴⁾。この地は我々が考察の対象としているアッティカの辺境とよく似た自然環境のもとにあり、参考になる点が多々あると考えられるため、それらの中からN. Gavrielidesによる調査例を簡単に紹介しておきたい⁽¹⁵⁾。

調査の対象となったのはアテネの南約150kmの位置にあるフルニ谷で、東西の長さ約8km、南北の幅約1kmを測り、その西端はコロニス湾に達している⁽¹⁶⁾。谷の半ばから北に入るとディディマの高原に至るが、この辺りは古代にはヘルミオネとエピダウロスとの国境地帯にあたり、前二世紀にその領有権をめぐる係争に対してミレトスとロドスが調停を行い、これをヘルミオネ・エピダウロス両国の共有地とする裁定を下した記録が碑文に残されている⁽¹⁷⁾。フルニの村がこの谷の唯一の集落であり、ここに定住する390人の村民は、オリーブ栽培を中心に果樹（citrus）や穀物の栽培、牧羊（山羊）、漁労などに従事して生計を営んでいる。土地は自然植生と耕作地とに大別されるが、そのいずれもが何らかの形で人間と家畜によって利用されている。

まず自然植生についてみると、フルニ谷のエコシステムは、松林（pine forest）、マーキ（maquis、ジュニパーなどの灌木が疎に生えている林）、フリガナ（phrygana、膝元くらいまでの高さの香りの強い草本が群生する開地）、草原（grassland）の4コミュニティ



図1 南アルゴリス (van Andel & Runnels, 註14文献, Map 2)

から構成されている。これらのコミュニティは、理論的には草原—フリガナー—マーキー松林の順で変遷し、そのいずれかの段階でコミュニティが破壊された場合には、再び草原から変遷が繰り返される。もし人の手が入らなければ、このように最終的には安定した松林によって覆われることになるが、実際には最も卓越した種が人間であるために、人間とその家畜にとって有益な産物を増大させる方向で、コミュニティは不安定な状態に維持されている。

調査時点で谷の全面積の約8%を占めていた松林は、上に述べたようにフルニ谷のエコシステムのクライマックスである。18世紀以前にはより広い範囲を覆っていたと伝えられるが、独立戦争後、とりわけ1864年に公有地と教会領が独立戦争の功労者に分配された結果、急速に松林は失われたと伝えられる。松林の消滅は、1) 羊飼いが放牧地に必要な草原を作るために焼く、2) 農民が果樹園や耕作地を開発するために焼く、3) 木材のために伐採される、等の理由により起こるといえる。これらは通常もとの松林にまで回復することは少ないが、ある区域では、第二次世界大戦の折に焼失した松林が、土地所有権をめぐる紛糾のために15年間公有地とされそこでの放牧が禁じられた結果、調査時点では松林がマーキーに卓越するまでに回復しつつあった例も報告されている。

マーキーは谷の全面積の半分近くを占め、松林が伐採されたり燃やされたりした後の草原

にとって代わるばかりでなく、放棄された耕作地もマーキによって覆われる。これらの地域では、その灌木が薪などの形で直接利用される他、公有地として放牧にも利用されている。フルニ谷では、この公有地で放牧を行う場合、村民は羊（あるいは山羊）一頭につき7ドラクマを、また村外者はその倍額を支払わなくてはならないという。マーキはまた、オリーブの栽培に欠かせない存在であるが、それは新しいオリーブ畑を開発する際に、マーキに自生する野生種のオリーブに栽培種のオリーブを接ぎ木する必要があるからである。

フリガナは、フルニ谷ではごく僅かの面積を占めるに過ぎないが、岩石層が露出する地点のように堆積土の乏しい場所では、他のコミュニティに卓越して存在する。草原は、事実上、穀物畑の休閑地に過ぎない。

これに対して耕作地は、オリーブ畑、穀物（主に大麦）畑、果樹（オレンジやレモンなど）園、葡萄畑からなっているが、面積の上で大半を占めるのはオリーブ畑と穀物畑であり、これらはしばしばオーヴァーラップしている。しかし、そのオーヴァーラップの仕方は一様ではなく、谷の東側の不規則な丘陵斜面ではオリーブが卓越し、土地が次第に平坦になる谷の西側では、オリーブは疎らになり穀物畑の景観はよりオープンなものとなる。穀物畑では、年毎に大麦－休閑－豆類－休閑の順で耕作が繰り返される。

以上にその概要を示したフルニ谷のエコシステムは、南部ギリシア本土の乾燥地域に大枠においてほぼ普遍的に妥当するものと考えて良いであろう。これと関連して注目しておきたいのは、古代ばかりでなく現代のギリシアにおいても特徴的な土地の分散保有（land

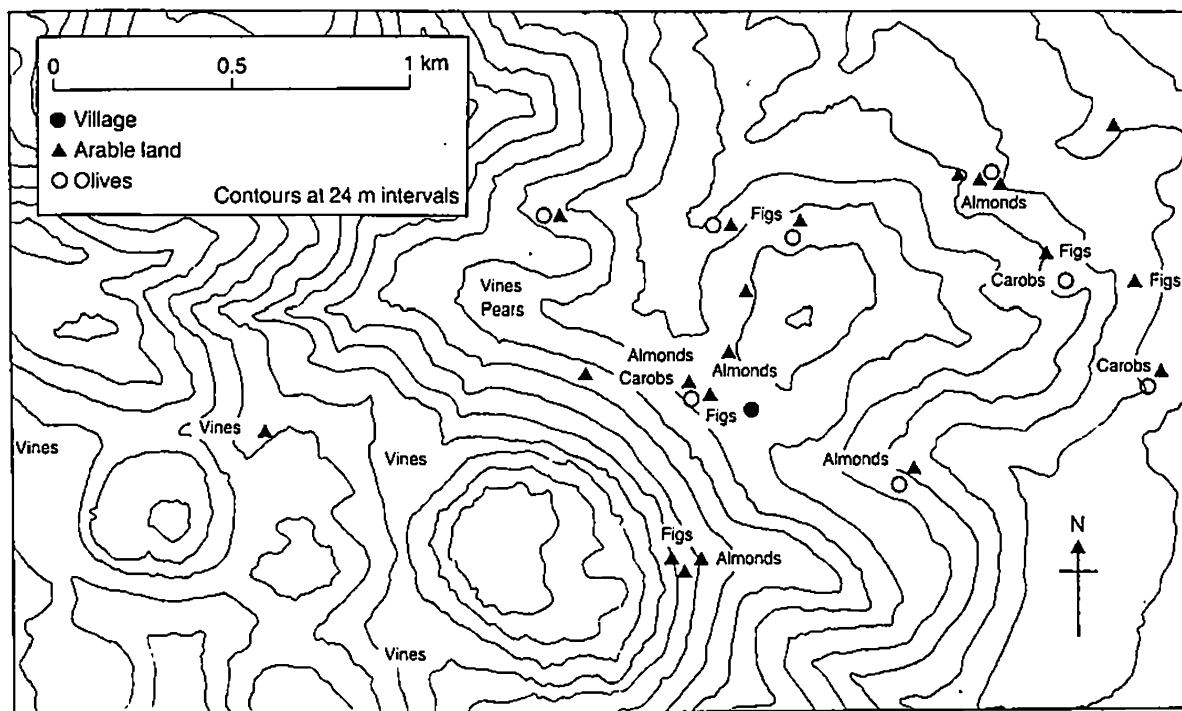


図2 メサナにおける分散土地保有の状況
(Forbes, 註19文献, Fig.1によるOsborne, CLP, Fig.13)

fragmentation) と多種栽培 (polycropping) とが、いずれも従来きわめて非合理的な土地利用形態のように理解されてきているものの、生態学的な観点からは非常に合理的であるという指摘である⁽¹⁸⁾。

H.A. Forbesによれば、嫁資や均分相続によって獲得された土地を分散して保有することにより、より幅広い小環境 (niche) の利用が可能となる。その結果、ある小環境が何らかの悪条件による被害を受けるという事態が生じて、別な小環境における収穫でそれを補うことが可能となり、全体としては年毎の気候変動にもかかわらず比較的安定した収穫を期待できるというのである。単一の作物だけを栽培するのではなく複数の作物を分散して栽培するのも、同じ理由による。図2はForbesが調査を行った南アルゴリスのメサナにあるコソナ村のある家族が耕作する土地の分布と、そこで耕作される作物を示したものである。なおコソナ村では、調査時点で一家族の所有耕作地の平均が約29str.、それが平均18の土地に分散させられていたことが報告されている⁽¹⁹⁾。

ちなみに文献で確認される古代の大土地所有の中でも最も規模の大きい例は、ファイニッポスがメソゲイアに所有していたエスカティアであるが、これは例外的に分散地の合計ではなく一続きの土地であったことが知られている⁽²⁰⁾。その点でファイニッポスの農場が山がちの僻地であったであろうことが、まったく異なる文脈からG.E.M. de Ste. Croixによって推測されているのは興味深い⁽²¹⁾。というのも、分散所有という土地所有形態の持つメリットは一続きの耕作地に多様な小環境を取り込むことによっても得ることが可能であり、そこからファイニッポスの農場に限らず、非分散大土地所有は平野部よりはむしろ限られた範囲に豊かな小環境を含む丘陵地に成立することが多かったのではないかと、という仮説が導かれるからである。筆者は別の機会に古典期アッティカの孤立農場が辺境の丘陵地に広範に分布する状況について報告したが、その状況の背景にはこのような生態学的エレメントが作用していた可能性も考慮されてしかるべきであったろう⁽²²⁾。

以上のような辺境に対する生態学的認識とともに、次節ではいよいよアッティカの国境地帯に視点を移すことにしたい。

IV. 古典期アッティカの国境地帯

アッティカはその北をヴォイオティア領と、その西をメガリスと接しているが、ここでは自然地形に従ってその辺境地帯 (図3) を、オロポス、スクールタ平野、オイノエ平野、クンドウーラ谷、カンディリの5地域に便宜的に分割し、そのうちオロポスを除く4地域について以下で概観する。オロポスを除外するのは、これをめぐるヴォイオティアとアテネとの確執が文献史料から既に良く知られていること、並びに他の4地域の場合とは異なって、オロポス係争問題においてはオロポスという自律的な色彩の濃い町の帰属そのものが両者の間で揺れ動く現象が見られるからである。

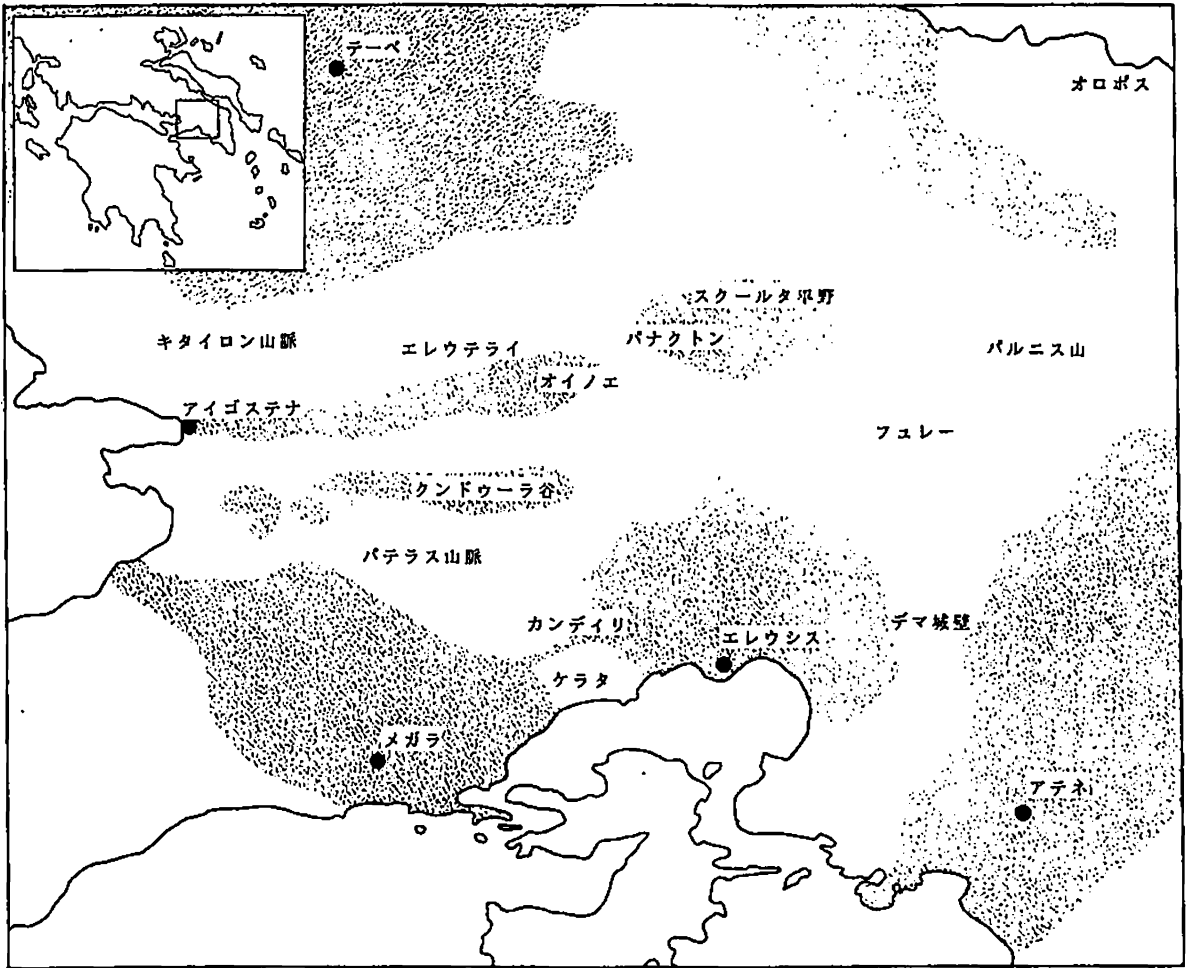


図3 アッティカの辺境

(1) スクールタ平野

スクールタ平野はパルニス山系の北西に位置する高原盆地で、海拔約500mの平坦面は東西約12km 南北約5kmの範囲に広がっている。この盆地は1985年以来M. H. Munnを中心とするスタンフォード大学のプロジェクトの調査対象となっており、近い将来その成果が正式公刊されることが期待される⁽²³⁾。以下に述べる観察は、それまでの暫定的なものであることを、予めお断りしておきたい。

この盆地に残されている考古学的証拠の中では、南西端のカヴァサラ山頂（海拔713m）にある城塞と、東北端のピュルガリ山頂（海拔736m）にあるツークラティの塔の存在が際だっている。カヴァサラの城塞は、かねてからE. Vanderpool他の研究者によってアテネの辺境の要塞パナクトンであることが強く推測されていたが、上記のプロジェクトによる調査に際して待望の壮丁碑文が発見され、この同定は動かしがたいものとなった⁽²⁴⁾。これに対してツークラティの塔は、J. Oberによってパルニス山北麓にあるリミコの塔と共にアテネ側の信号塔ないし見張りの塔と解釈されていたが、近年J. M. Camp IIによって正しく指

摘されているように、これらはヴォイオティアに分布するコンパートメント・タワーに共通する特徴を備えており、ヴォイオティア側の信号塔であった可能性が高い⁽²⁵⁾。パナクトンとツークラティの塔とは、アテネとヴォイオティアによって長く争われたスクールタ平野を挟んで向かい合うように立地しており、パナクトンがアテネ側の拠点である以上、ツークラティの塔はヴォイオティア側の拠点と考えるのが妥当であろう。なお、パナクトンはアテネ側の城塞拠点（壮丁を配置するphylakteria）であったとはいえ、他のそのような城塞拠点とは異なり、自身がアテネのデーモスでもなければ近隣にもデーモスがなく、かなり前線基地的な性格を持っていたと考えられる⁽²⁶⁾。

スクールタ平野をめぐるアテネとヴォイオティアとの抗争については、伝説上ではアッティカ王メラントス（Melanthos = 黒髪王）とヴォイオティアの王クサントス（Xanthos = 金髪王）との戦いが有名であるが⁽²⁷⁾、歴史的にはペロポネソス戦争中この城塞がアテネとヴォイオティアとの間で奪い合われた経緯をトゥキュディデスが詳しく物語っており、それが国境地域の理念に関して大変に興味深い知見を与えてくれる⁽²⁸⁾。即ち、前422年にヴォイオティア側は内部からの裏切りによってパナクトンを手中に収めたが、翌年アテネ側とスパルタ側との間にニキアスの和が結ばれると、講和条約の条項のひとつとしてパナクトンのアテネへの返還が定められた。ところが、条約締結を受けて返還を果たすべくスパルタ側の使節がヴォイオティアに赴くと、パナクトンの要塞はヴォイオティア人の手によって跡形もなく破壊された後だった。これに対するヴォイオティア側の申し開きは、パナクトンの城塞を破壊したのは「この地の帰属について、昔アテーナイ、ポイオーティア間に紛争が生じた結果、両国いずれも此処に住居を営まず、共通の牧場として用うべしという古い誓約があったため」というものであった。

かかる古典史料の言及に対して、スタンフォード大学の踏査はそれをかなり裏づける考古学的証拠を明らかにしてきている。灰色ミニュアス土器と黄色ミニュアス土器の存在によりパナクトンが中期青銅器時代から居住されていたことは確かであり、それはミケーネ時代を経て原幾何学文様期まで続く。しかし、それから暫くの間、パナクトンにおける居住の痕跡は途絶えている。表採された土器片は前5世紀後半に再びパナクトンが居住され始めたことを示しており、それは前3世紀まで及んでいる。次にパナクトンが居住されるのは、フランク民族が入って来た13世紀以降のことになる。なお、パナクトンの南約3kmにあるコリノカストロも、この調査によってミケーネ時代盛期の諸宮殿が相次いで崩壊し文化内容に地方色が色濃く現れるLHIIIC期（およそ前12世紀）に主に居住された先史時代の遺跡であることが判明したが、ここでもやはり原幾何学文様期を最後に人跡は絶える。このような状況及び平野内のいくつかの区域における踏査の結果から、トゥキュディデスが言及する誓約の有無はともあれ、原幾何学文様期から前5世紀までスクールタ平野は実際に居住地としては利用されていなかったとみなして、誤りないのではないかと考えられる。

(2) オイノエ平野

オイノエ平野はスクールタ平野の西に一段低く広がる肥沃な高原であり、キタイロン山脈の南麓に沿って東西に細長く延びている。ここには、相互に6km余りを隔てて二つの大規模な古典期の城塞遺跡が残っており、その同定問題は長く研究者を悩ませてきた。しかし今日では、キタイロンの狭間を抜けるドリュオスケファライ道（J. Oberのthe Kaza Pass Routes）の出口にそびえる岩山の頂を堅固な楼の連なる城壁で囲んだギフトカストロが古代のエレウテライであり、穏やかに起伏する平野の只中にあるミュールポリスは古代のオイノエであるという大方の見解に、もはや異論はないであろう。これらがともに城塞の様相を呈していることは、オイノエがヒッポトンティス部族に属するアテネの国境デーモスであったのに対して、少なくとも古典期にはエレウテライがヴォイオティアの前線基地であった事情に因るものであろう⁽²⁹⁾。いずれの遺跡においても現在見えている城壁はおそらく前4世紀の構築になるが、オイノエの城壁がラムヌースやスニオンと共通する特徴を示すのに対して、エレウテライの城壁がヴォイオティアのシファイなどコリント湾岸の城塞遺跡の城壁と類似しているのも、同様の事情から理解される。

以上の点から、古典期におけるヴォイオティア領とアテネ領との境は、オイノエ平野では例外的にかなり明瞭に見てとることができる。そして、現代のエレウシス―テーベ道路の傍らに半壊の姿を曝しているマジの塔がこの国境と何らかの関わりがあったとするCampの指摘は、注目に値する。なお、マジの塔とオイノエとはいずれも部分的な崩壊に対する修築の痕跡を残しているが、これは前427年にヴォイオティアで頻発した地震との関連を考えて良いかもしれない⁽³⁰⁾。エレウテライの城壁にはそのような痕跡はなく、マジの塔とオイノエの城塞の構築が、エレウテライの城塞の構築よりも遡ることを示すひとつの傍証となる。

オイノエ平野における緊張した状況は、前5世紀のどこかの時点でエレウテライがヴォイオティア側の前線基地に転じた結果もたらされたものであり、そこで観察される考古学的証拠は、アッティカと中部ギリシアを結ぶ最も重要な古代の道がここを通っていたことに大きく規定されていたと考えられる⁽³¹⁾。比較的豊かな耕作地を擁しながら、知られている限りにおいて、残されている遺構が軍事施設に限られるのも、それが原因であった可能性が高い。

(3) クンドウーラ谷

マジの塔から5km程エレウシス―テーベ道路を南下すると、パレオホリの近くで一本の舗装道路が西に分岐し、これは銀色に輝く連山マクロン・オロスと雄大なパテラス山脈との間に延びる静かで牧歌的な谷あいを通り、アイオス・イオルギオスの小邑に続いている。

この全長10kmほどの細長い谷がクンドウーラ谷であり、古代には現在とは異なってかなり広範に人の手が入っていたらしく、別の場所で述べたように豊富な考古学的証拠が確認されてきている⁽³²⁾。但し、ある事情のために集約的な踏査は実現しておらず、H.Lohmannによる踏査を初めとして、議論はすべて粗放的な踏査の成果によっている⁽³³⁾。

その中で明らかに最も重要な遺跡は、アイオス・イオルギオスの南斜面上にある集落跡で、これには粗石城壁 (rubble fortification) によって囲まれたアクロポリスが伴っている⁽³⁴⁾。この遺跡は、これを初めて報告したI.Sarrisによってパウサニア스에言及のあるメガラのエレネイアであると推定されたが、この同定はほとんど顧みられていない⁽³⁵⁾。その原因は、まさにアテネとメガラとの国境についての認識の相違にある。

最初にSarrisの説を批判したK.J.Belochから最新のLohmannによる研究に至るまで、アイオス・イオルギオスの集落遺跡がエレネイアではないと主張する研究者は、すべてアテネとメガラとの国境が西のヴァシホリアとクンドウーラ谷との分水嶺を越えて東に（つまりアッティカよりも）あった筈はない、という地図上の観察による先験的な仮説の上に立って議論を展開する⁽³⁶⁾。クンドウーラ谷がアッティカに向かって開いた谷であることも、この仮説を裏づけているように見える⁽³⁷⁾。Lohmannに至っては、アイオス・イオルギオスの集落遺跡をデーモスと呼ぶことを躊躇せず、未だ場所が同定されていないアッティカのデーモスの中からヒッポトンティス部族の内陸区のデーモスであるアナカイアをその候補としてあげているが、その前提条件、つまりアイオス・イオルギオスが行政区としてアッティカに属する根拠については、「地理的に見てアッティカである」と簡単に済まされている⁽³⁸⁾。しかし、果してこの仮説は正しいのであろうか。

考古学的証拠から見る限り、アッティカとされるクンドウーラ谷とメガラ領とされるヴァシホリアやクリフテスとの間に、明確な境界線は引き難い。ともにパテラス山脈の麓なしいし中腹にあるこれらの谷や盆地には、軍事施設としての色彩が濃い塔や小規模な城塞とともに、丘陵の豊かな小環境に立脚することによって土地の集中保有を実現させた塔を伴う孤立農場が広範に分布しており、それらの間は道路網によって密接に結ばれていたことが判明している。従って、クンドウーラ谷を制度的にアッティカであると断定する証拠は十分なものではなく、ある時期には制度的にメガラに属していた可能性も決して否定されるものではないため、Sarrisの説も再評価されて良いであろう。しかし、より重要なことは、この状況は、次に述べるカンディリの場合とともに、そこに国境線という明確な線引きを行うことによってよりも、むしろそれを、ある時期に辺境に独特の現象が出現した地域として把握すべきことを示唆しているのではないか、という点である。

(4) カンディリ

アテネとメガラとは、前5世紀のペロポネソス戦争開始直前と前4世紀の中頃に、少なく

とも二度に渡って国境地域をめぐる紛争を経験したことが史料に伝えられている。4世紀の紛争に関する史料では、問題の地域は「神聖なオルガス」と呼ばれており、これが5世紀の紛争の際にトゥキュディデスが「神聖な土地と境界未確定の地」として言及している地域に相当することは疑いがない⁽³⁹⁾。このオルガスは、U. Kahrstedtによってメガラ平野とトリア平野西端（現在のマンドラ村）とを結ぶカンディリ間道に沿って広がる谷、とりわけ現在アイオス・メレティオス（通称メレタキ）の教会がある辺りの内陸平野に求められ、これが通説となっている⁽⁴⁰⁾。その根拠は、アテネとメガラとの国境について記す史料が、あるものはこれをケラタの峰とするのに対しあるものはこれを更に西のイアピス河としており、それぞれを指標として地図上に国境線を引いてみるとその二つの仮想国境線の間カンディリの内陸平野が位置しているのが、当然ここが両国の係争対象になったに違いないというものである。

確かにカンディリはオルガスの候補として相応しい地域ではあるが、Kahrstedtの机上の推論にも問題がないわけではない。国境に関連して現れる二つのトポニムについては、以下のように理解することも可能であろう。即ち、アテネからメガラ方面を望む時に最も顕著な境界の地理的特徴は、ケラタの峰である。しかし、実際にアテネからエレウシスを経てメガラに向かう場合、カンディリ間道をとるにせよ海岸沿いの道を辿るにせよ、ケラタの峰は間もなく視界から遮られて見えなくなり、やがて実際に横切ることになる地理的特徴こそイアピス河に他ならない、と。言い替えれば、ケラタの峰は国境の象徴としては相応しくても、現実の国境線としては機能し得なかったであろう。そして、このような理解が可能であれば、オルガスの候補地をカンディリに限定する必要もなくなる。

実際、カンディリ間道とクールーリオティコ・モノパティとして知られる古代の内陸交通路に沿った地域では、先のクンドウラ谷やヴァシホリア、クリフテスなどと極めて類似した状況が、考古学的証拠からは見てとることができるのである⁽⁴¹⁾。別の場所でも示唆したように、筆者はオルガスとはパテラス山脈の周辺に散在するこれらの豊かな内陸盆地や谷の総称であり、メガラとアテネとの間に政治的な緊張が高まった場合に、主としてこの地域を通る内陸交通路の重要性が強く認識されて国境紛争を惹起するのではないかと考えている⁽⁴²⁾。

V. 国境の構造について

我々はIII節において現代の南ギリシアの田園部における民族学的研究の一端に触れ、多くの小環境を備える丘陵地帯が生態学的には安定した豊かな開発の可能性を秘めていることについて述べた。そこからは、丘陵の起伏するアッティカの辺境部においても古代には様々な形での利用が行われていたのではないかと、という予測が導かれるが、IV節で概観したように、踏査の成果はこの予測を裏切るものではない。今日では社会状況の変化に伴っ

て開発そのものや開発によって獲得された耕地を維持する意欲はもはや失われ、おそらく古代以来連綿と受け継がれてきたであろう耕作地のあった山野は生態的に卓越するマーキや松林によって覆われてしまっているが、一度山火事などによってそのヴェールが剥されると、そこには文献史料に言及されることが乏しいために等閑視されてきた数多くの遺跡が観察されるのである⁽⁴³⁾。

そのような辺境の遺跡は、要衝の岩山の頂などに築かれた城塞や孤立塔などの軍事施設と、テラスによって開発された耕作地を周辺に持つ農業関連の施設とに大別される。

軍事施設は、しばしば内陸交通路との密接な結びつきを示している。E. Vanderpoolによって報告されているように、スクールタ平野におけるパナクトン並びにオイノエ平野におけるオイノエという二つのアテネ側の重要な軍事拠点からは、それぞれ入念に構築された古代の道路がエレウシスのあるトリア平野に向かっている(図4)⁽⁴⁴⁾。これらの道はトリア平野の直前で合流し、険しい峡谷を抜けて平野に達するが、この出口の東にはパレオカストロと呼ばれる遺構が、西には頂上に円形の塔を戴くプラコトの城塞があって、北から

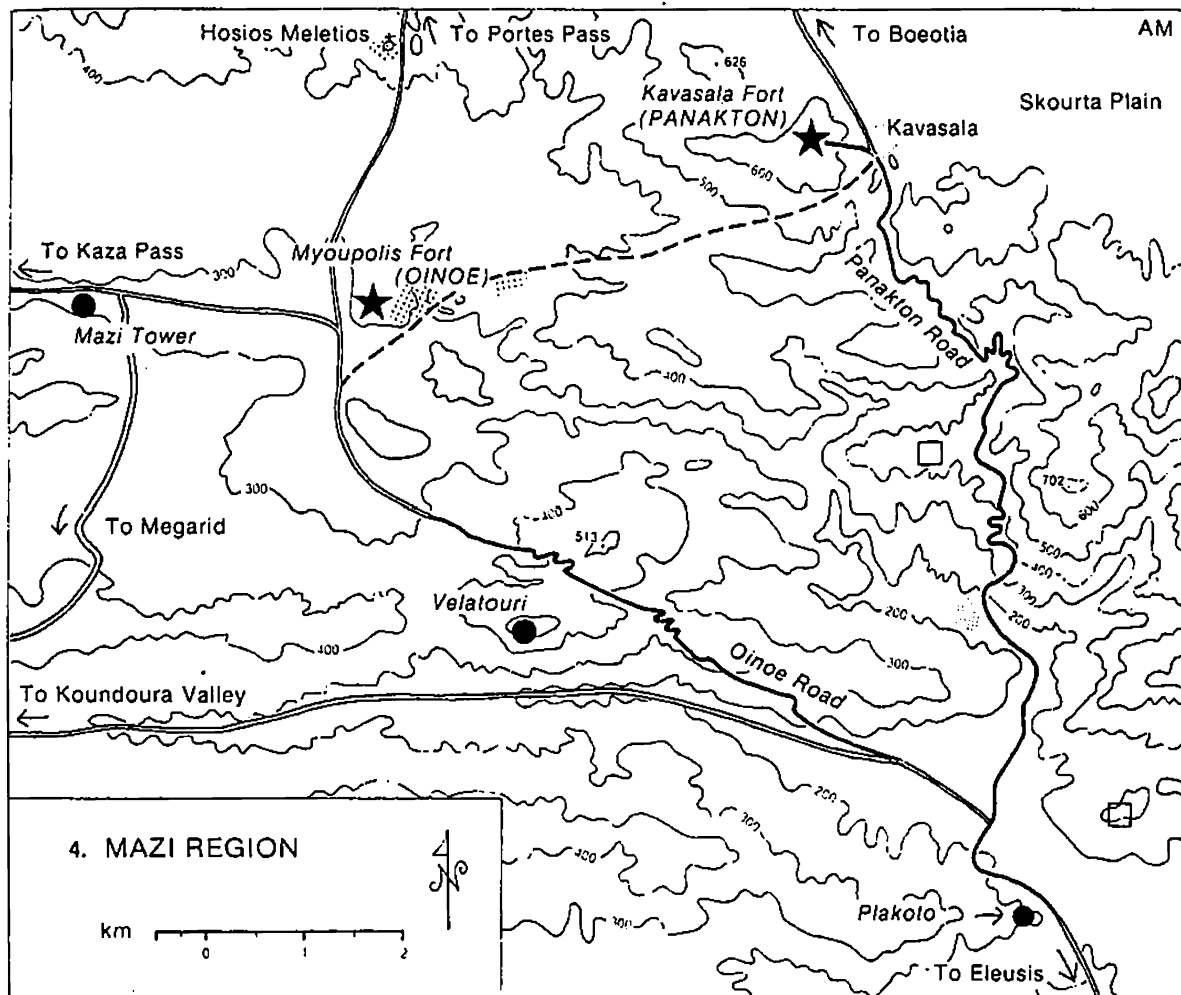


図4 アッティカ北西部の内陸交通路 (Ober, *PA*, Map 4)

の侵入に対して両側面から防御を固めている⁽⁴⁵⁾。オイノエとブラコトとの中間には更に海拔532mのヴェラトゥーリの塔があり、このルートを補強するとともに信号中継地点の役割を果たしていたと考えられている⁽⁴⁶⁾。マジの塔がアテネとテーベとを結ぶルート of 管理と関係があることは広く認められており、クンドウーラ谷の道路脇の塔やミロスの塔についても、内陸交通路の存在を考慮することによって初めてその立地の特殊性を理解できるであろうことは、別の場所で論じた通りである⁽⁴⁷⁾。

塔については、それらがしばしば予想されるポリスの平野領域の端に立地する傾向があることも、見逃すことができない。J.M.Camp IIは、ポリスの辺境にある塔が、一般に険しい峰など境界に相応しい自然の地形特徴の上にはなく、むしろその下に位置することに注目し、このような塔は敵側の領域に突出して築かれるのではなく自らの側の領域の端に築かれたのではないかという見通しを明らかにしているが⁽⁴⁸⁾、この指摘はおそらく正しいであろう。メガラ平野の東端にあるピュルガリの塔は、その意味でメガラ側がカンディリの出口を抑えるために築いた軍事施設であり、ブラコトは上に述べた道のアテネ側への出口を抑えるために構築されたと考えるのが合理的である⁽⁴⁹⁾。オイノエとパナクトンの存在を考慮するならばブラコトは余りにアッティカの内部に入り過ぎている観を与えないではないが、史実が教えるように、一度戦争が勃発するとオイノエはしばしば敵に囲まれパナクトンも敵の手に奪われる危険が絶えず、アテネ側が確実に自らの領域と認めることができたのはトリア平野までであった可能性も高い⁽⁵⁰⁾。

そこで特に塔などの軍事施設の上述した特殊な在り方に着目した場合、少なくともこれらの遺構の存在によって特徴づけられる時期（前5世紀後半から4世紀の末にかけて）において、ポリスとポリスとは今日の国境線のような明確な一本の線によって隔てられていたのではなく、双方が事実上の領域外とみなす中間地帯によって隔てられていたのではないか、という仮説が導かれる⁽⁵¹⁾。図5は、そのような国境のモデルを、これまで概観してきたアッティカの国境地帯の様相を参考にして、二つの場合に分けて図示したものである。

(1)は、二つのポリスの辺境に、地理単位として明確な平野が存在する場合である。アッティカの辺境ではスクールタ平野をめぐる状況がこれにあたり、そこではパナクトンがAに、ヴォイオティア側の信号塔がBに相当する。平野部は理念的には双方のポリスともに居住を営んではならない放牧地とされていたが、実際にはアテネ側はパナクトンの要塞を後ろ盾にして若干の開発を試みたであろうし、平野部における踏査の成果も、それを裏づけている。しかし、ヴォイオティア側の信号塔からの牽制は、それが広範囲に及ぶことを妨げたであろう。

(2)は、二つのポリスの辺境が、多かれ少なかれ起伏があつて見通しのきかない丘陵地帯によって構成されている場合である。この丘陵地帯では、しばしばその谷筋を縫うようにして内陸交通路が発達しており、それが平時には両ポリス間の通商活動などに用いられ、また戦時には軍事行動を展開するのに欠かすことのできないルートを提供した。アテネと

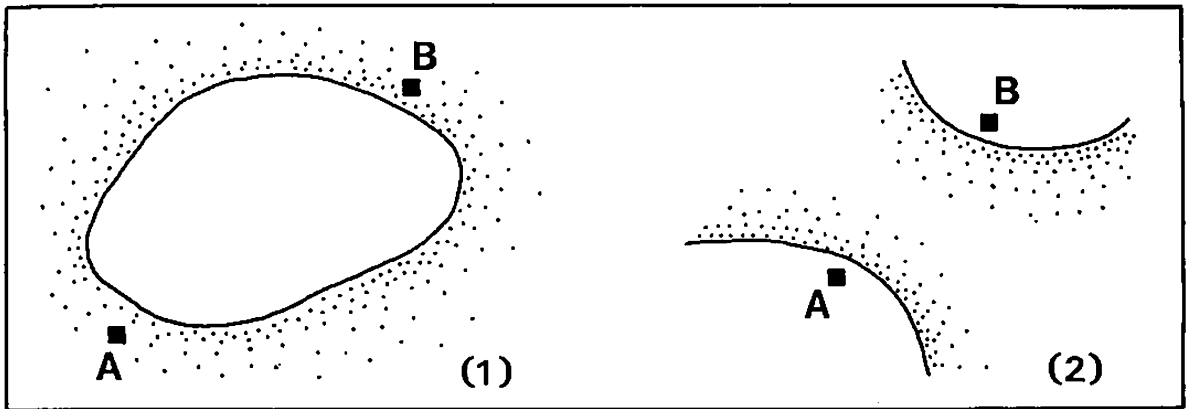


図5 古典期ポリス間の国境モデル

メガラとの国境地帯は、こちらの場合にあたる。

この二つのモデルは景観的には著しく異なる状況に対応するものであるが、その構造においてはほとんど同一とみなすことができる。即ち、二つのポリスの境界には、当時の人々がその存在や性格について意識していたか否かを問わず、今日の我々の目から見れば緩衝地帯とも呼ぶに相応しい地域が広がっていた。この緩衝地帯は、時に制度的には「どちらにも属さない土地」あるいは「境界が確定していない土地」として認識され、また経済的には「共通の放牧地」あるいは「神殿領」という解釈が与えられていた⁽⁵²⁾。しかし、そのような理念にもかかわらず、とりわけ緩衝地帯が豊かな耕作可能性をもつ丘陵地帯からなっている場合に、しばしばそこに開発の手が及んだであろうことは、踏査によって見出されてきている農業関連の遺跡の分布からも明らかである。

アテネとメガラとの国境地帯では、古代には緩斜面がテラスによって広範に造成されていたばかりではなく、更に傾斜が急な地点には長さ数メートル程度の土止めの壁が築かれて、そこでオリーブなどの果樹が栽培されていた。それらの多くが、丘陵部の豊富な生態系を利用することによって実現された土地の集中保有に立脚する孤立農場を基盤として開発されていたであろうことは、これまでしばしば述べてきた通りである⁽⁵³⁾。クンドウーラ谷などでは、農場の遺構が谷底の開けた平坦部を避け、目につきにくい岩山の上などに立地する傾向が看取されるが、更に踏み込んで解釈することが許されるならば、このような現象も、そこにおける土地開発がポリスの内部でのみ機能する制度が及ばない、いわば制度の隙間をついて行われたために、一度国境地帯が緊張に包まれ大軍勢が内陸交通路を通過するような場合には、略奪などに対して自ら防衛する必要があったことを窺わせるものかもしれない。それは、とりもなおさず、これらの丘陵が制度的な意味でポリス本来の領域には属するものではなかったことを示唆している、と考えてもよいのではないだろうか。

なお、オイノエとエレウテライとの場合、緩衝地帯の幅は一見して著しく狭いが、これは本来のアテネとヴォイオティアとの緩衝地帯がキタイロン山脈であったにもかかわらず、

何らかの政治的な原因のためにエレウテライが比較的新しい時代にヴォイオティア側の前線基地に転じた事情によるのであろう⁽⁵⁴⁾。オイノエ平野における複雑な軍事施設の乱立は、そこに重要な内陸交通路の存在という条件が加わって創出されたものと考えられる。

しかし、このオイノエ平野の場合に端的に示されているように、国境地域に対する意識とそこにおける現実とは歴史的に一定であった訳ではなく、従来は幅のある緩衝地帯であった国境も、前4世紀以降になると次第に線によって画定されていく傾向があったようである。前5世紀にアテネとメガラの紛争の原因の一つとなったオルガスは、ペロポネソス戦争後も神殿領という名目の緩衝地帯であり続けたが、前4世紀半ばの紛争に際しては、田園部担当将軍エフィアルテスのもとにメガラに侵入したアテネ側は、この地の境界線を画定することに成功する⁽⁵⁵⁾。構築の正確な時期については不明ながら、前4世紀のある時点でアイガレオスとパルニスとの間の谷が全長6kmにも及ぶ大城壁によって遮断されたのも、この傾向と何らかの関連がある可能性は否定できない⁽⁵⁶⁾。線による区画はポリスばかりではなくデーモスの単位でも進んだらしく、前4世紀の末までにアッティカのいくつかのデーモスで、デーモス境界標が連続して岩に刻まれたことが判明している⁽⁵⁷⁾。アッティカを離れるならば、フォーキスにおけるデルフィとアンプロッソス及びフリュゴニオンとの境界線画定、アルゴリスにおけるヘルミオネとエピダウロスとの境界線画定は、いずれも時代が下って前2世紀のことに属する⁽⁵⁸⁾。これを一般的な傾向とするには、あまりに管見に触れた史料は乏しいが、ポリス間の国境における緩衝地帯の消滅、面による境界から線による境界への移行は、辺境を考える上でのひとつの作業仮説として提出することが許されるのではないだろうか。

VI. おわりに

以上、主として考古学の側におけるフィールド踏査の成果に基づきながら、ポリスの現実に光をあてていく試みの一環として、古典期アテネの国境の問題に雑駁な考察を加えてきた。踏査によって確認されてきた遺跡についての詳細を他稿に譲ったために意を尽くせなかったきらいはあるが、辺境という文献史料からは知ることの困難なポリスの側面に関し、そこにいったい何があったのか、あるいはそれらがどのように機能していたのかといった点について、いくらかなりとも具体的なイメージを持つための手がかりを提示することができたならば、本稿の意図は果たされたと言わなくてはならない。

生態学的パラダイム、即ち遺跡をそれがかつて適応していた環境における生態学的システムの構成要素として把握する考え方の枠組みは、1970年代に地理学から先史考古学に導入され⁽⁵⁹⁾、1980年代以降ようやくギリシアの古典考古学でもその有効性が認識されるに至っている。現在も各地で続けられている組織的なフィールド踏査の成果が公刊される暁には、土地利用などに関するこれまでの古典史料の解釈は生態学的パラダイムのもとに少

なからず見直しを迫られようし、これまで史料的限界から考察されることの稀であったボリスの辺境への理解も深められるであろう。

本稿は、かかる趨勢に関心をよせながらアッティカの辺境で行ってきた踏査に際し、折に触れて脳裏に去来したボリスの境界に対する筆者なりの考えをまとめたものに過ぎない。「古典期アッティカの国境をめぐる」という副題も、国境をめぐるの問題を体系的に議論するという意味あいよりは、むしろ灼熱の太陽が照りつける岩山の頂に立って、あるいは鉛色の雲が垂れ込める沈鬱な空のもとで雪に足をとられながら国境地帯を足でめぐって思ったことについてのメモという意味あいを込めて添えたものである。国制史や土地制度史の専門家の方々からの批判をまちつつ、筆をおきたい。

[付記]

本稿は、1987年から1991年までギリシア政府給費留学生として同地に学んでいた際に行った踏査、及び1991年夏に東京大学文学部布施基金の助成を受けて行った追加踏査の成果の一部に基づいている。この間、明治大学の馬場恵二先生と畏友古山夕城氏からは、歴史時代の問題について数々の御教示をいただいた。東京大学の伊藤貞夫先生と東京学芸大学の桜井万里子先生からは、帰国後に各種の学会や研究会で研究報告する機会を賜り、それらにおける質疑応答を通して啓発されるところが多かった。以上の方々に加え、踏査の際に様々な援助を惜しまれなかったアテネ在住の友人の方々、並びに教養学部における弓削ゼミ以来の敬愛する先輩であり、拙稿の掲載を許されたクリオ編集部の橋場弦氏に、この場を借りて心から感謝の意を表したい。

註

- (1) A.M.Snodgrass, An Archaeology of Greece : The Present State and Future Scope of a Discipline, Berkeley & Los Angeles, 1987, (以下、Snodgrass, AGと略) Chap.3. 及び、これに対する筆者の書評(『西洋古典学研究』XL号1992年、所収予定)を参照。なお新しいものでは、J.Rich and A.Wallace-Hadrill (eds.), City and Country in the Ancient World, London & New York 1991.に、田園部をめぐる研究が多く収められている(以下、Rich & W-Hadrillと略)。
- (2) 伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』東京大学出版会、1982年、145頁。但しこの引用部分はボリスの小規模性を説明するためのものであり、本来ボリスの領域の評価を意図した発言ではない。
- (3) R.Osborne, Classical Landscape with Figures : The Ancient Greek City and its Countryside, London 1987, (以下、Osborne, CLFと略) 145 ; A.M.Snodgrass, Archaeology and the Study of the Greek City, in Rich & W-Hadrill, 5.

- (4) T.E.Rihill and A.G.Wilson, *Modelling Settlement Structures in Ancient Greece : New Approaches to the Polis*, in Rich & W-Hadrill, 59-95.は、まさにポリスのこの特性 (small societies coexisting side by side) に着目して、その空間的な相互関係からポリスの発生と展開を論じる。
- (5) ポリスの辺境に関しては、G.D.Rocchi, *Frontiera e confini nella Grecia antica*, Milan 1988.があるが、参看できなかった。
- (6) この傾向を代表するのが、J.Ober, *Fortress Attica : Defense of the Athenian Land Frontier 404-322 B.C.*, Leiden 1985. (以下、Ober, FAと略) であり、そこでは辺境付近の帰属が明確でない遺跡が、しばしば誤ってアテネの防衛システムの構成要素に組み込まれてしまっている。
- (7) 第89回史学会大会報告記事 (『史学雑誌』100編12号1991年106頁) 参照。
- (8) J.M.Fossey, *Topography and Population of Ancient Boiotia*, Chicago 1988 (以下、Fossey, TPABと略), xiii.
- (9) A.M.Snodgrass, *Survey Archaeology and the Rural Landscape of the Greek City*, in Rich & W-Hadrill, 113-36. なお、ギリシアを含む地中海域におけるフィールド踏査の現況については、D.R.Keller and D.W.Rupp (eds.), *Archaeological Survey in the Mediterranean Area*, BAR International Series 155, Oxford 1983. (以下Keller & Ruppと略) を参照。
- (10) C.Renfrew and M.Wagstaff (eds.), *An Island Polity : The Archaeology of Exploitation in Melos*, Cambridge 1982. (ミロス島) ; A.M.Snodgrass and J.Bintliff, *The Cambridge/Bradford Boeotian Expedition : The First Four Years*, *Journal of Field Archaeology* 12, 1985, 123-62. (ヴォイオティア)
- (11) R.Hope-Simpson, *The Limitations of Surface Surveys*, in Keller & Rupp, 45-47.
- (12) O.Rackham, *Land-Use and the Native Vegetation of Greece*, in M.Bell and S.Limbrey (eds.), *Archaeological Aspects of Woodland Ecology*, BAR International Series, Oxford 1982, 172-98. ; do., *Ancient Landscapes*, in O.Murray and S.Price (eds.), *The Greek City : From Homer to Alexander*, Oxford 1990 (以下、Murray & Priceと略), 85-111.
- (13) 学史に名高い岩田拓郎氏による「古典期アッティカのデーモスとフラトリア - 「ヘカトステー碑文」の検討を中心として -」 (『史学雑誌』71編3号1962年1-48頁) に援用されているアッティカの自然景観に対する理解 (同16-7頁) は、その代表的なものといえよう。周知のように岩田氏のエスカティア解釈は篠崎三男氏の優れた研究によって修正を受けているが、その篠崎氏が史料を詳細に分析する一方でL.LangdonとL.V.Watrous、あるいはJ.Bradfordといったアッティカのフィールド踏査に経験の豊かな研究者の成果を参照していることは、見逃されてはならない。篠崎三男「古典期アッティカの公有地に関する若

千の問題」(『歴史学研究』469号1979年34-44頁)、40頁の註36を参照。

(14) この成果を基礎に、生態学的な知見を活用しつつアルゴリス地方の歴史を辿ったのが、T.H.van Andel and C.Runnels, Beyond the Acropolis : A Rural Greek Past, Stanford 1987.である。なお、独自の踏査に基づきながら豊富なカラー図版を配することによってアルゴリスの歴史と風土に読者を誘う A.Kyrou, Sto Stavrodhromi tou Argolikou (『アルゴリスの十字路で』), Athina 1990.は、この地域に対する理解を深める上で必須の文献である。

(15) N.Gavrielides, The Impact of Olive Growing on the Landscape in the Fourni Valley, in M.Dimen and E.Friedl (eds.), Regional Variation in Modern Greece and Cyprus : Toward a Perspective on the Ethnography of Greece, Annals of the New York Academy of Sciences vol.268 (以下、Dimen & Friedlと略), 143-57.

(16) この地域の概要については、T.H.van Andel and S.B.Sutton, Excavations at Franchthi Cave, Fascicle 2, Landscape and People of the Franchthi Region, Bloomington & Indianapolis, 1987. を参照。

(17) L.Moretti, Iscrizioni Storiche Ellenistiche, no.43.、及びパウサニアス『ギリシア案内記』(下) 岩波文庫(近刊)の馬場恵二氏による2.36.2への註解を参照。

(18) Snodgrass, AG, 74. ; Osborne, CLF, 37-38. ; 古山正人「古代ギリシアの土地と農民」 弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ-古典古代の比較史的考察-』河出書房新社1988年164頁など。もともとV.Hansonのように、分散保有の積極的な評価にやや懐疑的な立場をとる研究者もある。Osborne, CLF に対するV.Hansonの書評 (AJA 92, 1988, 295-6) を参照。

(19) H.A.Forbes, We Have a Little of Everything : The Ecological Basis of Some Agricultural Practices in Methana, Trizinia, in Dimen & Friedl, 236-50.

(20) [Demosthenes] 42.5-7. ; R.Osborne, Pride and Prejudice, Sense and Subsistence : Exchange and Society in the Greek City, in Rich and W-Hadrill, 119-45.

(21) G.E.M.de Ste. Croix, The Estate of Phaenippus (Ps.-Dem., xlii), in E.Badian (ed.), Ancient Society and Institutions, Studies Presented to Victor Ehrenberg, Oxford 1966, 109-14.

(22) 註7を参照。

(23) 概報としてM.H.Munn, New Light on Panakton and the Attic-Boiotian Frontier, in Boiotica, Vortrage vom 5. Internationalen Boiotien-Kolloquium, Munchen 1989, 231-244.

(24) パナクトンの同定については、E.Vanderpool, Roads and Forts in Northwestern Attica, California Studies in Classical Antiquity 11, 1978 (以下、Vanderpool,

Roads and Fortsと略), 231-6. ; Ober, FA, 224-5. ; Y.Suto, Explorations in the Northern Megarid I : The Kryptis Region, The University of Tokyo, Bulletin of the Department of Archaeology, 9, 1990 (以下、Suto, Explorations Iと略), 133, n.6.他を参照。壮丁碑文については、M.H.Munn and M.L.Zimmerman Munn, The Stanford Skourta Plain Project : The 1987 and 1988 Seasons of Survey on the Attic-Biotian Frontier, AJA 93, 1989, 274.

(25) Ober, FA, 147-8. ; J.M.Camp II, Notes on the Towers and Borders of Classical Boiotia, AJA 95, 1991 (以下、Campと略), 193-202.

(26) D.Whitehead, The Demes of Attica 508/7-ca.250 B.C. : A Political and Social Study, Princeton 1986 (以下、Whitehead, Demesと略), Appendix 6, 402-3.

(27) FGrH 70 (Hellanikos) F22 ; FGrH 26 (Konon) F1, XXXIX ; FGrH 70 (Ephoros) F22 (=Harpokr. s. Apatouria.) ; Fossey, TPAB, 433. なお、パウサニ阿斯による異伝(9.5.16)では、クサントスを騙し討ちにしたのはアンドロポンボスとなっている。

(28) Thuc.5.3,18,36,39,42. 引用は、久保正彰訳岩波文庫による。

(29) Camp, 199-202.

(30) Thuc.3.87.4. マジの塔については、J.Ober, Early Artillery Towers : Messenia, Boiotia, Attica, Megarid, AJA 91, 1987, Figs.22-24. あるいは同時期かと思われる修築の跡は、コリント湾に面するアイゴステナの城壁の塔でも観察される。Ober, op.cit., Figs. 18-19. 及び馬場恵二訳パウサニ阿斯『ギリシア案内記』(上)岩波文庫 200頁の付図参照。なお、アイゴステナの塔の頂部落石は、1981年2月末から翌年にかけて断続的に生じた地震によるものである。AR, 1981-82, 3.

(31) Campは、前506年のヴォイオティア側に対するアテネの勝利によってエレウテライ周辺がアテネ側に併合され、パウサニ阿斯に言及のあるように(1.38.8)木彫祭神像がエレウテライのディオニュソス神殿からアテネのアクロポリス南麓にあるディオニュソスの聖所へ運ばれたのは、この時の政治的統合の試みを示唆するものと考え(この試みは、明らかに成功しなかった)。Camp, 200. パウサニ阿斯は、エレウテライがテーベ憎さから自発的にアテネへの併合と市民権賦与を望んだと伝えているが、後者が実現しなかったことは、エレウテライを再度ヴォイオティア側に復帰させた理由だった可能性もある。いずれにせよ、この方面に対する国境がキタイロン山脈であるという意識は広く行き渡っていたにもかかわらず、現実として古典期のエレウテライはヴォイオティア側の拠点であり続けた模様である。Cf. Eur. Supp. 757-9.

(32) Y.Suto, Explorations in the Northern Megarid II : The Koundoura Valley, The University of Tokyo, Bulletin of the Department of Archaeology, 10, 1991. (Forthcoming) (以下、Suto, Explorations IIと略)

(33) H.Lohmann, Das Kastro von H.Georgios (Ereneia) : Zum Verhältnis von

Festungswesen und Siedlungsmorphologie im Koundoura-Tal, Marburger Winckelmann-Programm 1988, 1989 (以下、Lohmann, H.Georgiosと略), 34-66. Lohmannは集約的な調査を計画したが、ギリシア考古局(エフォリア)が調査占有権を振りかざして許可しなかった模様である。

(34) 粗石城壁とは切り石を使わずに構築された壁を指し、アッティカ周辺のそれは、J.R.McCredie, *Fortified Military Camps in Attica*, Hesperia Suppl. XI, Princeton 1966. に集成されている。

(35) Paus. 1.44.5 ; I.Sarris, Ereneia, ArchEph, 1910, 151-8. 例外的にこれを肯定的に評価するものとして、E.Meyer, RE, s.v. Megara, 1936, 160.

(36) K.J.Beloch, *Zur Karte von Griechenland*, Klio 11, 1911, 431-49. ; S.Van de Maele, *Le site d'Erenea et la frontiere attico-megarienne*, Phoenix 34, 1980, 153-9. ; A.Muller, *Megarika : VIII Erenea*, BCH 106, 1982, 379-407. ; J.Ober, *Ancient Farms on the Attica-Megara Border : A Reconnaissance of the Megalo and Mikro Vathychoria*, AJA 86, 1982, 280. ; Lohmann, H.Georgios.

(37) S.Van de Maele, *La route antique de Megara a Thebes par le defile du Kandili*, BCH 111, 1987 (以下、Van de Maele, Kandiliと略), 201, n.21.

(38) Lohmann, H.Georgios, 37, 61-3.

(39) IG II² 204 ; FGrH 324 (Androtion) F70 ; FGrH 328 (Philochoros) F155 ; [Demosthenes] 13.32. なお、前5世紀のいわゆるメガラ禁令関係の史料ではプルタルコスにのみオルガスへの言及があるが、これはプルタルコスが前4世紀の出来事と混同していることに由来する可能性がある。W.R.Connor, *Charinus' Megarian Decree*, AJP 83, 1962, 225-46. ; do., *Charinus' Megarian Decree Again*, REG 83, 1970, 305-8.

(40) U.Kahrstedt, *Die Landgrenzen Athens*, AM 57, 1932, 9.

(41) Van de Maele, Kandili.

(42) Suto, *Explorations II*.

(43) 近年北部メガリスで多くの遺跡が報告されているが、これは山火事によって踏査が容易になったのもその一因である。Osborne, CLE, Fig.10は、放棄された段々畑がマーキによって覆われつつある様子をよく示している。

(44) Vanderpool, *Roads and Forts*.

(45) Ober, FA, 158-60. Oberのパレオカストロに対する評価はネガティブであり、古代の遺跡であるか否かさえ疑わしいと述べる。もともと、Oberはパレオカストロを双眼鏡で遠望しただけで、実見はしていない。

(46) Ober, FA, 157-8.

(47) Suto, *Explorations I*, 128-30.

(48) Camp, 202, n.6.

- (49) Ober, FA, 176は、ピュルガリの塔をアテネ側の拠点とする。註6を参照。
- (50) 例えばM.H.Hansen, The Athenian Democracy in the Age of Demosthenes, Oxford 1991, 231, Map 1では、エレウシスのケフィソス河の西は、すぐにメガリスとされている。
- (51) M.H.Munnは、C.Edmonson, The Topography of Northwest Attica, unpublished dissertation, Berkeley 1966. (筆者未見)に従い、スクールタ平野について、このような土地こそge methoriaだったのではないかと示唆し、この語が国境の係争地(テュレアなど)にしばしば用いられることから、一般にge methoriaは「国境地域」ではなく「国境の間の土地」と解される可能性を指摘している。Hesychiusがmethoriaについてto metaxy ton horionと説明しているのが、参考となろう。ちなみに、久保正彰訳岩波文庫では、2.27.2において緩衝地帯、4.56.2では中間地帯という訳語が使われているが(いずれもテュレアについて)、2.18.2、5.3.5(いずれもパナクトンについて)では、国境ないし国境地帯と訳されている。
- (52) 伊藤正氏は、神殿領の私的蚕食の実態を論じる過程で神殿の金庫と国庫との相互補完性に着目し、神殿領といえどもその所有者は事実上ポリスそのものであったことを強調している。伊藤正「神殿領私的蚕食の実態 -ヘラクレイア碑文の分析を中心として-」『西洋史学』156号1990年36-52頁。経済的な側面において神殿領がポリスに対して一定の役割を果たしていたことは、領域としての神殿領が空間的な側面においてポリスの構造に一定の役割を果たしていたのではないか、という仮説を導くであろう。その聖域がしばしば領域の端あるいは国境地帯に立地していたことは、既にPolignacによって指摘されている。F.de Polignac, La naissance de la cite grecque : Cultes, espace et societe VIII^e-VII^e siecles avant J.C., Paris 1984.
- (53) Suto, Kryptis. ; do., Koundoura.
- (54) Hdt.7.141.3 ; Xen. Mem.3.5.25. ; Paus.1.38.8. 註31において述べたように、パウサニアスの記述は表面的には逆の状況を示している。しかし、ここでのパウサニアスの関心はディオニューソス神像のエレウテライからアテネへの到来にあり、歴史的には、この記述はエレウテライの帰属が不安定であったことの証拠とみるべきであろう。
- (55) 註39参照。しかし、フィロコロスやアンドロティオンによれば、デルフィに神託をうかがった(IG II² 204)ところ、神託は問題のエスカティアが耕作されることを望まなかった。これは、緩衝地帯を残そうとするポリスの意図の現れに他ならないのではないだろうか。
- (56) デマの大城壁については、J.E.Jones, L.H.Sackett, and A.J.Graham, To Dema : A Survey of the Aigareon-Parnes Wall, BSA 52, 1957, 152-89.
- (57) いわゆるrupestral deme horoiであり、これらがデーモスの境界標であることは、H.Lauter, Zwei Horos-Inschriften bei Vari, AA 1982, 299-315.によって初めて提唱され、H.Lohmann, Atene, eine attische Landgemeinde klassischer Zeit, Hellenika

Jahrbuch 1983, 98-116.に詳述されている。J.Traill, An Interpretation of Six Rock-Cut Inscriptions in the Attic Demes of Lamprai, Hesperia Suppl. XIX 1982, 162-71.では、これらを前307/6年のマケドニアによるアッティカの改革と結びつける考えが示されている。Cf. J.S.Traill, Demos and Trittys : Epigraphical and Topographical Studies in the Organization of Attica, Toronto 1986, 116-22. ; Whitehead, Demes, 29, n.110.

(58) デルフィ、アンプロッソス、フリュゴニオンの境界画定については、M.G.Colin, Fouilles de Delphes, III,2, 140-147 (no.136). ; Osborne, CLF, 51.、ヘルミオネとエピダウロスの国境画定については、註17参照。但し、これは残存史料の年代であり、これ以前にも境界画定の試みはあったらしい。Colin, loc.cit.

(59) A.S.Goudie, The Growth of a Relationship, in J.M.Wagstaff (ed.), Landscape and Culture : Geographical & Archaeological Perspectives, Oxford 1987, 23.

〔追記〕

本稿の執筆中、東京大学名誉教授村川堅太郎先生の訃報に接した。アテネの都市部と周辺部をめぐる問題は、実に半世紀以上も前に村川先生によって議論されており（村川堅太郎「民主政期に於けるアテネとアッチカ」『史学雑誌』51-1/2, 1940年、岩波書店『村川堅太郎古代史論集』1986年所収）、その慧眼に改めて畏敬の念を抑えることができない。ここに、謹んで御冥福をお祈り申し上げる次第である。

(すとう よしゆき ・ 学振特別研究員 ・ ギリシア考古学)